

神谷傳兵衛――



牛久シャトーの創業者 神谷傳兵衛は、安政三（1856）年、三河国幡豆郡松木島村（現 愛知県西尾市一色町）に生まれました。

傳兵衛が洋酒に興味をもったのは、横浜の外国人居留地でフランス人の経営する「フレッレ商会」の洋酒製造場で働いていたときでした。

持ち前の誠実な人柄で、経営者に可愛がられていた傳兵衛は、ある日突然、激しい腹痛に襲われました。当時の医学を以てしても「原因は不明。自然回復しか手段はない」と医師も半ば諦めの状況のなかで、日々衰弱の一途をたどっていました。その状況を知ったフレッレ商会の経営者は、傳兵衛を見舞い、持参したぶどう酒を飲ませました。ぶどう酒を飲むと、たちまち気分が爽やかになり、病苦が和らいでいきました。その後もぶどう酒を毎日少しずつ飲用すると、しだいに元気が出て、ぶどう酒を1本を飲み終える頃には病気はすっかり治ってしまったのです。このとき、ぶどう酒の滋養効果を身をもって体験したこと、傳兵衛の運命は大きく変わったのでした。

神谷傳藏とフランス留学――

明治 27(1894) 年 9 月 24 日、傳兵衛の夢を叶えるべく養嗣子となった神谷傳藏はフランスへと旅立ちました。



派遣された先は、フランス最大のワイン産地であるボルドー地区 デュボワ商会のカルボンプラン村醸造場でした。ぶどうの栽培方法を究め、醸造技術や機械の操作方法、応用方法などを習得しました。

研修期間の 2 年の歳月が過ぎ、傳藏は修了書を受け、習得した技術と知識、多数のテキストや醸造用具、栽培用サンプルなどを日本へ持ち帰りました。

ここに、日本国内における本格的葡萄園開設の準備が整いました。

牛久への進出――

傳兵衛は、傳蔵の帰国から時を経ずして、早速葡萄園の最適地を求めました。

夢の実現地として選ばれたのが、稲敷郡岡田村（現 茨城県牛久市）の原野「女化原（おなばけがはら）」でした。120 町歩（約 120ha）の広大な土地を購入した傳兵衛は、そのうちの 23 町歩（約 23ha）を開墾し「神谷ぶどう園」と名付けました。葡萄園にはぶどうの苗木 6,000 本が移植され、生育は順調でした。

傳兵衛は、この葡萄園の成功で、本格的な牛久進出を決意したのです。

牛久シャトーの建設～夢の実現へ～

建設にあたっては、設計者に岡田時太郎、森山松之助を迎え、フランス・ボルドー地区の葡萄園の最新様式を取り入れ、さらに傳蔵の実地経験にもとづき、改良が加えされました。こうして二年余の歳月をかけ、明治 36（1903）年 9 月、神谷傳兵衛の夢であった“日本初の本格的ワイン醸造場”が完成しました。

牛久シャトーでは、ただちに最新の外国製機械の導入と傳蔵の栽培・醸造技術の指導により、高級ワインの生産を可能にしました。その品質は、国内外の数々の名誉ある賞を受賞し、海外からも高く評価されました。



歴史を語る 1 枚の写真 One piece of photograph which recites history



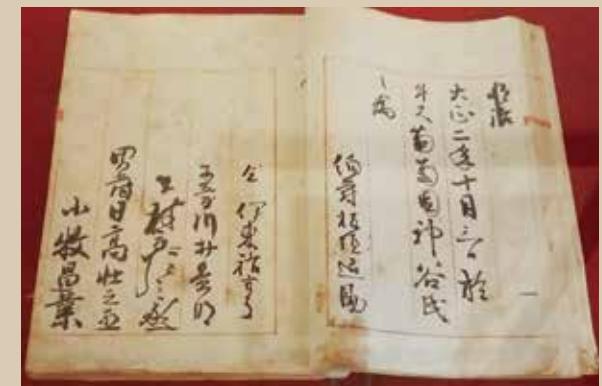
明治から大正にかけて政財界の偉人たちが牛久シャトーに多数訪問しました。

事務室（現 本館）二階の大広間「比蜜閣（ひみつかく）」では数々の祝宴が開かれました。なかでも特に盛大な祝宴といわれているのが、大正 2（1913）年 10 月 3 日の板垣退助来園時の宴です。

※写真の中央左（女性 3 名の奥）が板垣退助。

— 板垣退助 —

土佐藩（現 高知県）出身。明治維新の元勲として知られ、維新後は民撰議院設立建白書の提出、自由民権運動の指導者として活躍。帝国議会の開設に尽力し「憲政の父」とも呼ばれる。自由党を結成し、大隈重信とともに日本初の政党内閣「隈板内閣」を組閣。内務大臣を務めた。



▲板垣退助 来訪時の芳名帳